



夏季休業中開催の研修講座報告 2

岡野先生「体育科における協同的な学び」講座

7月31日、三重大学の岡野昇教授をお招きし、「体育科における協同的な学び」の講座を実施しました。参加された方の生き生きとした表情が印象的でした。

講座は、「ペアで握手じゃんけん」のゲームからはじまりました。会場からはたくさん笑いがうまれます。このあと、岡野先生は次のように話されました。

「今、どんな場面で笑いましたか。」

みんなが笑ったのは、成功した時でなく、自分が失敗した時でした。岡野先生は「失敗はだれにでもあること。その失敗を笑い飛ばしてくれる雰囲気クラスにあるかどうかが大変重要。また、担任の先生の考え方がはっきり子どもたちに伝わっており、『この先生はこれをやったら怒るぞ』という基準がはっきりしているか、一年間守り切れるかどうかの問題だ」と話されました。

次はペアで「背中合わせ立ち」をしました。ここでは、自分で立とうとするのではなく、相手に身をゆだね、相手の力を感じ、その力加減を知りながら、相手に立たせてもらうという感覚が大切なのだそうです。次は4人組で、その次は8人組で、その状態で左右に移動したり、回ってみたり・・・というように、課題をより高いものにしていきます。一人では成り立たない学びによって、自己と他者の関わりの間に共感が生まれ、協同的に問題解決に取り組むことができしていきます。

後半、参加者に次のように問われた場面が心に残ります。

「次のような指導をしていませんか。」

手のひらをマットにしっかりついて、おへそを見ながら小さくなって、ボールのように転がってみましょう。

手はできるだけ遠くについて、跳び越しましょう。

リレーで一番大切なことは、バトンパスです。

ハードルで一番大切なことは、跳び越し方です。

縄をしっかりと見て、跳びましょう。

.....

すべての外れな指導です。
運動の中心のおもしろさから見ると。

どれもこれも、当たり前のように行われている指導ではないでしょうか。「目からウロコ」と言えいいのでしょうか、自分自身を振り返るよい時間となりました。



体育の授業では、「自分の身体を理解してどう動かすか」、「運動の中心のおもしろさ」を大切にすべき。

リレーは「スピード」をつなぐことが本質。つまり、バトンパス練習に時間をかけるのではなく、トップスピードを維持しながら「スピード」をつなぐことに着目し、タイムを縮めるところにおもしろさがあるのだそうです。「ペアの合計タイムをどれだけ縮めることができるかな。」という教師の問いかけにより、子どもたちは相談し、テークオーバーゾーンを上手に使うことを考えるようになっていくと先生は語ります。

「どんな授業も、運動の中心のおもしろさを保障すると、その中で子どもたちは相手に要求したり、教え合ったりしていく。そして、自然に仲間との関係が濃くなり、お互い分かりあえるようになる」という話の時は、生き生きした子どもたちの姿が浮かんできます。

最後に、「体育の授業は、子どもたちに上質の課題を与えて、子どもの笑顔・声・汗を出させること。運動の中心のおもしろさを子どもたちに与えていく授業づくりに、まずは一单元ごとに挑戦し、体育の授業を変えていきましょう。」と岡野先生がまとめると、会場に拍手がおこりました。

狭い会場ではありましたが、その中で跳び箱、ハードル、縄跳び、サッカーなどについて、本質に迫る楽しい活動方法を、参加者に実践していただいたり、手本になっていただいたりしながら、たくさん教えていただきました。「姫と悪代官」などの楽しい活動もありました。「がんばれ!」「協力しろ!」と言わなくても、運動の中心のおもしろさを大切にしたい指導の中で、自然に子どもたちは動くことに納得の講座でした。

アンケートより

(一部抜粋 満足度 100%)

実技がたくさんあり、とても分かりやすく楽しかったです。笑顔がたくさんある研修でした。ペア学習、体育以外のいろいろな場面でも活用していきたいと思いました。改めて指導要領の大切さを知りました。(指導の根拠になっている。)

今までしてきた指導が的外れであったことに気づけてよかったです。今日学んだことを休み明けからすぐ使いたいです。どの教科もですが、本質を教員が理解してから指導しないといけないと今までを反省しました。

「目からうろこ」なお話ばかりでした。体育の時間の実際の運動時間が5分もない(現状がある)とは・・・。反省することばかりでした。子どもたちがしっかりと運動できるように勉強していかなければと思いました。本質をつかむ必要があるのだと思いました。

